ファントム強奪

ファントム勇者伝説 1

竹島 将

講談

ファントム強奪（ごうだつ） ファントム勇者伝説（ゆうしゃでんせつ）I
竹島将（たけしましょう）
© Sho Takeshima 1987

講談社文庫
定価420円

昭和62年8月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——凸版印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-184047-9 (0)

講談社文庫

ファントム強奪

ファントム勇者伝説 I

竹島 将

講談社

The Legends

of

Phantom Fighters

I

目次

(1) ブルー 7
(2) アディオス 15
(3) 銃弾の街 29
(4) チャイナ・パレス 40
(5) シビリアンの男 49
(6) ゴールライン 53
(7) ファースト・コンタクト 60
(8) ジバンシーの香りだけが残った 69
(9) ハーシーズ 75
(10) オンリー・ワン・ショット 80
(11) カウンター・アタック 93
(12) 脱出 99
(13) ショルダー・ホルスターの男 102
(14) 幸子 108

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

(15) そして、再会 115
(16) 再び戦闘へ 127
(17) 軍用ジープの男 132
(18) 届けられた危険 143
(19) 異なった思惑 170
(20) 岩岡からの連絡 176
(21) セカンド・ラウンド 187
(22) 別　離 225
(23) 土曜の夜へ 234
(24) 慟　哭 250
(25) 逃避行、そして 256
(26) 夏の島 263
(27) リターン・ザ・スカイ 275
(28) エンド・オブ・カーニバル 288
(29) ブルー 300

ファントム強奪

ファントム勇者伝説I

本文イラストレーション／末弥純

〈1〉　ブルー

青かった。
永遠に満ちた青が、ここにあった。
底しれぬ輝きを放っていた。
古代から永久（とわ）に向かって流れ続ける時間（とき）が今、停止しているように思えた。

一万七千メートル。
いや、正確に言えば、こいつの実用上昇限度、一万七千七百メートルの空を俺はマッハ一、秒速三百メートルではじきとばされている。
マグダネル・ダグラス、Ｆ４ＥＪファントム。茨城県航空自衛隊百里基地第七航空団所属、三一八号機、俺の親友。
俺はいつも、こいつでここにいる。もうどのくらいになるだろう、数え切れないほどの時間、このクソ青い空の中に。
三十億円、燃料満載時には三十トンにもなる機体の中、まるでメカニックのカンオケのような

コクピット。

この高度まで昇ると、キャノピーを通して見る頭上はすでにダークブルーだ、あの色の上に宇宙がある。

雲は数えるほどしかない。音速を超えているのに、やけに周囲がゆっくりと感じられる。

光学照準器、キャノピー、そして、ファントム特有の、まるで蛇の頭のようなロングノーズ、その上に黒く塗られている機首反射除け塗装、さらに、突き出した針のようなピトー管。その先に、海と空との境、水平線が地球が球体であることを誇示するかのように、ゆるやかな曲線を見せている。

後部座席には俺の長年の相棒、ナビゲーターの岩岡二尉がいる。

口のまわりを覆う酸素マスクをとっちまえば六十秒以内に確実に失神してしまう高度で俺はいつも、輝き、きらめく、〝青〟を見る。

地球という天体をとりまく空気が、はるか彼方からの光を受け、きらめく〝青〟となって俺の目に飛びこんでくる。

俺達の特権だ。この〝青〟はキャンバスにも、印画紙にもだせない。

空気の光の色だ。

このフライトが何の目的だったのか、俺の頭の中は今、総てが消え、ただ〝青〟を見つめている。

ふいにレシーバーから、岩岡の小さなタメ息とも声ともつかない呼吸音がきこえた。

機体が微妙にぶれた。
視界の右側で、何かが光った。
〝氷だ！〟
空気取り入れ口に氷がへばりついている。
コクピットのパネルについている防氷装置のランプは何も表示していない。
〝トラブルだ〟
〝クソったれ！　高度を下げないと！〟
俺の体内のアドレナリンが急速にスピードを増した。
〝何！〟
体がしびれたように動かない。
〝どうしたんだ！〟
パイロットスーツに包まれた体の、ありとあらゆる場所から、汗が吹きだす。
空気取り入れ口にへばりついた氷は、急激にその量を増す。
〝岩岡、俺の体はどうかしちまった。高度を下げろ！〟
俺が叫ぶ。レシーバーからは、何の応答もない。
氷の小さな塊が吸いこまれたかと思うと、エンジン音がバラつき、奇妙な低い悲鳴をあげた。
二番エンジンのタービンがブレード・アウト。レッドシグナルが花火のように光りだし、警報がコクピット中に響きわたった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〝岩岡！　俺は動けんのだ！　下げろ、高度を！〟
タービンの内圧を示す針がたたきあがる。
排気温度、レッドシグナル。
爆発するぞ！
次の瞬間、後方からたたきつけるようなショックが俺の背骨をきしませた。
〝やっちまった！〟
なんてこった、自動消火装置までトラブってやがる。
俺はふいに周囲に暗さを感じた。顔をあげると、きらめくような〝青〟が消え、囲りは何の光もない暗黒、黒一色だ。
〝何だ、これは！　嵐の中でも突っこんだのか!?〟
突然、強烈な〝G〟が俺を襲った。高度計は、まるでチャップリンの無声映画のように、急速に回転している。
すでに、一万を切り、八千。俺はしびれてしまっている体を必死に動かそうともがく。だが、もがけばもがくほど、体はシートにひきずりこまれるようだ。
俺は渾身の力をこめて、叫ぶ。
〝岩岡、スティックを引け！〟
だが、高度計はすでに五千、いや、もう、四千を切ろうとしている。
すべての音が急速に耳から失われていく。目の前が強烈な〝G〟で暗くなっていく。鼻から、

耳から、血が噴きだすのを感じる。暗黒の闇の中を真一文字に落下していく。
もう、口が動かない。高度計は二千を切った。突然、目の前が明るく、開かれる。
〝何!?〟
目の前に急速に迫ってくるものは〝東京〟だ。
人が動いているのがはっきりとわかる。車が、建物が。
〝頼む、逃げてくれ！　気づいてくれ！〟
だが、誰も上空を見上げようとはしない。
あと千。
〝クソッ！　意識が！〟
次の瞬間、体のしびれがうそのように消えた。
俺は自分のすべての力をこめて、スティックをひいた。
獣の叫びにも似た絶叫が響いた。

矢沢高雄の体がバネ仕掛けの人形のように、ベッドの上で飛びあがった。
息が荒い。下着も何もつけていない、ゼイ肉一つ無い体のいたるところから汗が吹きだし、強烈な自我を連想させる黒く太い眉の下にある眼が大きく見開かれ、前方を凝視している。
静寂が再び、彼の体を包んだ。フウと小さなタメ息をついた。規則的なエアコンの機械音が小さく聞こえた。両腕がシーツを強く掴んでいるのに気づいた。矢沢はゆっくりと時間をかけて、

体中の力を抜き、シーツを離した。手の平一面に汗がにじみ出ている。右の手の平をゆっくりと唇に近づけ、にじみ出ている汗をなめた。

〝今が、現実か、俺は生きてる〟

百八十センチはある長身をゆっくりと動かし、セミダブルのベッドから降りた。引き締まり、張りのある筋肉が、ガッシリとした広く大きな体を見事に包んでいた。

立ち上がった。クリーム色の絨毯の柔らかな感触が足の裏から感じとれた。

〝やせても枯れても、最高のホテルらしいな〟

矢沢はこんな地でも、必死に自分のホテルのレベルを保とうとしているこのホテルのプライドをふと感じた。

部屋の中には、エアコンのほど良く冷えた空気が漂っている。

ゆっくりと、その空気を体全体で感じとりながら、矢沢は歩き始めた。

部屋の中央にはセミダブルのベッド。さらに、壁一面に出来る限り、大きく作った窓。その下には、絨毯の色に調和させた、楕円形の白いテーブルと二つのイス。

カーテンの開いた窓の向こう、この八階の部屋の眼下には、三本に一本は光を発していない街灯に浮きだされた大通り。そしてその通りに停車した軍用ジープの周囲には、M16A1を構え、オリーブ色の制服を着た四人の政府軍兵士だけが、ガムを噛みながら、ひどく苛立った様子で彼らの他に人気のない大通りを見ていた。

矢沢はシャワーのコックをひねった。透明にはほど遠い、赤茶けた色をした湯が吹きだした。バスタブの横についている小さなコーナーから、ホテル備えつけの石鹸をとると、その包み紙を洗面台の上に置いた。

それには〝ホテル・カミノリアル〟と、印刷されており、さらに、その下にこうあった。

〝サンサルバドル〟

矢沢高雄、元航空自衛隊第七航空団二尉、No.1ファントムパイロット。

彼は今、どんよりとした、嵐の前ぶれを思わせる、熱くしめった空気によどんだ、雨期真只中、内戦の地、戒厳令下の八月のエルサルバドルにいた。

〈2〉　アディオス

あのときも俺はシャワーを浴びていた。十日前のことだった。
ロサンゼルス。
バスルームの壁に取り付けられた受信専用の電話機がベル音をバスルーム一杯に軽いエコーを伴って響かせた。
「ハロー」
俺はシャンプーの泡をまるで帽子のようにかぶったまま、言った。
「矢沢か、俺だ、松木だ」
「……」
「きいてるのか」
「ああ」
「気の無い返事だな」
シャワーの熱い湯は相変わらず俺の体をまんべんなく、暖めていた。白い湯気がバスルーム一杯に満ちている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com